

阪神・淡路大震災の被災地の現在を歩く

—震災20周年を前にした2014（平成26）年度「地理学特講」の覚え書き—

香川貴志

（京都教育大学）

Field Trip in Present Disaster Area of the Great Hanshin-Awaji Earthquake
—A Memorandum of Field Trip in Kobe and the North Part of Awaji Island—

Takashi KAGAWA

2014年11月30日受理

抄録：本論文は、阪神・淡路大震災20周年を前にした現地をフィールドとして、香川・久保訳（2014）『よみがえる神戸—危機と復興契機の地理的不均衡—』（Edgington, D.W. 2010 “*Reconstructing Kobe: The Geography of Crisis and Opportunity*”）に描かれた地区を歩いた記録である。現地行動に先立つ3回の事前学習会では、上記の書籍を講読のうえ、内容のプレゼンテーションと質疑を通じて被災地復興に関する知識の深化を図った。また、東日本大震災発生後に公開された、阪神・淡路大震災に関する論考をリストアップし、受講生一人あたり1本の論文を精読させ、まとめられた個々の要旨を一冊のブックレットにまとめて情報を共有した。20周年という節目を前にして、我われは防災意識の必要性を現地で再確認し、教育現場での意識徹底に向けた素地をささやかながら整えることができた。

キーワード：阪神・淡路大震災、震災復興、防災教育、土地区画整理事業、神戸

I. 現地実習地域の選定コンセプトと本稿の目的

今年度は、翌年に阪神・淡路大震災20周年の年を迎えることから、合宿形式の野外実習フィールドとしては近距離ではあるものの、神戸および北淡を現地行動の対象地域に定めた。記憶に新しい2011年の東日本大震災以来、学校教育の場でも防災についての意識や関心が高まっており（香川 2013a）、それを教員養成の段階から周知徹底しておくことが求められる。他方、東日本大震災での経験を受けて、社会の関心は津波対策と原発事故対応に向きがちで、直下型大地震に対する意識は相対的に低下しているように感じられる。しかし、環太平洋造山帯という地震多発地域と国土が重なる日本では、直下型とプレート境界型の二つのタイプの大地震に対する備えが必要である。いま改めて阪神・淡路大震災の経験を学んでおくことは、防災意識を維持していくうえで必須事項といっても過言ではあるまい。

このような観点に立つと、近畿地方に本拠を置く京都教育大学が阪神・淡路大震災の被災地を訪ねて震災復興や防災について学ぶことは、「地の利」を存分に生かした教育実践になると考えられる。また、香川が訳者の一人を務めた『よみがえる神戸—危機と復興契機の地理的不均衡—』は、外国人研究者のユニークな視点や構成からなる書籍であり、日本の行政システムや都市計画の特徴、地方自治体レベルと国家レベルでの考察を並行して進める大切さを改めて確認することができる。出版から間もないことも手伝って、そこから得られる新たな知見を受講生たちと共有できる大きな魅力もある。

そこで本稿の目的を、①事前学習で得られた成果の概要を紹介する、②現地での行動を記録する、③事後教育で得られたレポートの評価を行う、以上の3点に定めた。これらの成果は、当然ながら今後の防災教育の実践で活用できるモデルの一つとして機能しなければならない。従来の本講義、それに類する講義の備忘録としてまとめた拙稿（香川 2013a・2013b；香川 2014）¹⁾などととも、本稿は同様の野外実習を実施する際の参考に資するよう設計されている。

II. 予備登録、事前学習会の実施とその内容

予備登録はシラバスで公示したとおり、開講日に予備登録用紙を研究室前に掲出し、そこに受講希望者が記名していく例年のスタイルをとった。今回は1名のキャンセルが生じたが、その理由が夏季休暇中に大学主催の海外語学研修に参加する学生の経済的理由であったため、当然ながらキャンセルを認めた。結果、受講学生は学部「地理学特講」が33名（属性の内訳は、4回生が男子3名[全て社会領域、以下では特記無きものは社会領域]と女子1名[英語領域]、3回生が男子11名と女子6名[うち1名が技術領域、1名が家庭領域]、2回生が男女各6名、大学院「人文地理学特論」は全員が修士課程1回生で男子4名[教育学研究科教科教育専攻社会科教育専修3名と単位互換協定による奈良教育大学大学院生1名]と女子2名[教育学研究科教科教育専攻社会科教育専修1名と連合教職実践研究科授業力高度化コース1名]だった。結果、学部と大学院の受講生は合計39名で落ち着いた。最終日に借上を予定している大型バスの座席定員との関係で、受講生数の上限を44名にしていたため、ほぼ理想的な数の受講生が得られたといえる。

現地実習は2泊3日で行うのが通例で今回もそれを踏襲した。実施期間は8月24日(日)～26日(火)とした。現地実習での配当時間数は、初日が3・4限の2コマ(4時間)、2日目が5コマ(10時間)、3日目は2コマ(4時間)であるため、9コマ(18時間)となり、2単位を与える科目として6コマ(12時間)が不足する。そこで、ほぼ例年通りに2コマ(6時間)×3回的事前学習会を設定し、これを以って合計15コマ(30時間)の授業を設計した。事前学習会は、かつて水曜日の午後に実施することが多かったが、近年は教員採用試験関係のセミナーが多く設定されるため、ここ数年の慣例に従って全て土曜日に開催した。実施日は、5月17日、6月7日、7月5日に定め、これを研究室前の掲示と一括送信メールで告示した。

1. 第1回事前学習会(5月17日)

この事前学習会は、受講希望者が初めて顔を合わせる機会でもあるため、実質的な内容は授業ガイダンスとして、第2回および第3回事前学習会で行うテキスト紹介(『よみがえる神戸(副題省略)』を章ごとにパワーポイントを使って内容紹介)に加え、現地行動のアウトラインを説明した。開始時刻は11:30からとして、昼食を摂ってから集合するよう一括送信メールで指示した。

出席者が揃ったのを見計らって、まず授業ガイダンスを始めた。参加すれば単位が与えられるものではないことを強調し、課題提出や発表・質疑を重視することも伝えた。さらに現地実習の内容の理解を促すため、前年度の「地理学研究」の成果をまとめた香川(2014)の別刷を全員に配布した。

第2回及び第3回事前学習会で発表してもらう提示資料の作成については、野間ほか(2012)の内容を用いて、文字を多くし過ぎない、背景は暗色で文字を白などの明るい色にするなどの指示をするともに、スライドの枚数を12枚に制限した。これは配布資料を印刷する場合に、A4用紙1枚に6枚のスライドを配置してA3用紙1枚にまとめられる量を意識したものである。各学生が担当する章については、混乱を避けるため香川が指定した。また、テキストは大学生協と出版社に依頼して、第1回事前学習会までに全員が購入できる体制を整えてもらった。当日は体育会の学生などで試合日程が先約で入っている者もいたため、欠席者に対しては内容をフォローできるようメール連絡で授業内容の徹底を図った。

2. 第2回事前学習会(6月7日)

第2回事前学習会も、第1回の際と同様に11:30から開始した。ここでは、全体で8つの章からなるテキストのうち、第1章(序章を含む)から第5章までの紹介をもらった。各章は4～6人の学生が個別に発表資料と配布資料を作成し、全員がそれをメール添付で提出した。事前学習会当日は、同じ章を担当する者のうち立候補制で1名に代表としてプレゼンテーションを行ってもらった。各章とも滞りなく立候補者が出たうえ、質疑も極めて活発であった。こうしたことから防災教育に対する受講生の関心の高さがうかがえた。第2回事前学習会で扱った5つの章のうちの第2章は、それが理念的な内容であることから学部学生には少し荷が重いと思われるため、ここを大学院生に担当させた。

第6章(ここは長いので前半と後半に分割)以降については、第3回事前学習会で扱うことにした。しかし、

全員に課したスライド案およびそのプリントアウト版の配布資料の提出日は、締切についての不公平を避けるため、全員に第2回事前学習会での提出を求めた。ごく一部の受講生の提出が遅れたものの、大半の受講生は締切を遵守して資料を提出できた。この日の事前学習会は、若干の時間オーバーがあったものの、ほぼ予定通りに終えることができた。欠席者に対するフォローは初回と同様に一括送信メールを活用した。

3. 第3回事前学習会（7月5日）

事前学習会としては最終回となる第3回事前学習会も11:30から始めた。この日は第6章前半、同・後半、第7章、第8章の4セクションの紹介、そして香川による現地行動および8月17日締切で提出をさせる事前学習課題の説明を行った。第2回事前学習会と比べれば、少し消極的な受講態度であったものの、テキスト全体の情報共有を無事に終えることができた。

現地行動の説明では、第1日目が「人と防災 未来センター」とHAT神戸、東灘区森南町での現地視察を中心としたルート、第2日目が新長田、神戸新聞社、ハーバーランド、メリケン波止場、神戸華僑歴史博物館、南京町、旧居留地、市役所展望ロビーをめぐる現地視察、第3日目が宿舎を借上バスで発つての北淡震災記念公園（野島断層）訪問という予定ルートを紹介した。大学主催の海外短期研修（タイ）に参加する学生2名が現地行動の第1日目に参加できない（第1日目の夕刻に宿舎で合流せざるを得ない）ため、これらの受講生に対しては第1日目に訪問予定のHAT神戸（「人と防災 未来センター」への入館を含む）と森南町を事前に訪問させ、レポートを提出させることを伝達した。同様の措置は、教員採用試験の一次試験に合格し、二次試験が現地実習第1日目と重複した学生（院生を含む）3名にも後に改めて指示することになった。また、第3回事前学習会においては、安藤元夫（2003）、朝日新聞社（1995a、1995b）、日本地図学会（1995）を回覧した。震災直後の状況や復興事業の詳細について、画像や地図での情報共有が図れた。

さらに、8月17日締切の課題の説明では、香川が2014年6月3日にCiNiiで検索してリスト化した文献表を示し、そこから一人1篇ずつを重複なく選んでもらうこと、内容の要旨を181字以上、200字以内でまとめること、課題はメール添付で提出してもらう旨を告げた。選ばれた文献は、CiNiiで「阪神・淡路大震災」のキーワード検索をしてヒットする文献のうち、東日本大震災後（2011年4月以降）に公刊された5ページ以上の文献である。その条件を満たした論文は全部で41篇が選ばれた。これらの論文を「住宅、居住、コミュニティ関係」と「防災教育、子どもの災害ケア関係」に大別すると、前者が23篇、後者が18編だった。要旨をまとめる論文は、各受講生に先着順で研究室前のリストに記名をしてもらった。上の2つに大別した分野では、教員養成系大学であることを反映してか、後者の方が圧倒的に早く希望者で埋まった。

各々の受講生が1篇の論文要旨をまとめ、香川が2篇の論文をまとめれば全ての要旨が揃うため、集まった論文要旨を香川が集約して「人文地理学特論」を履修している大学院の受講生にブックレットとしてまとめてもらうことにした。ブックレットは現地実習の際に大学院生が持参してくれることになった。このブックレットは本稿への格納を考えたが、紙幅の都合により別稿（香川2015a、2015b）にまとめている。なお、課題作成のためのテンプレートは香川が作成し、7月5日の夜に一括送信した。この一括送信メールは、課外活動の試合等で第3回事前学習会を欠席した受講生へのフォローも兼ねたものとした。

III. 現地実習の実施とそのアウトライン

1. 現地実習1日目—8月24日（日）、曇りのち雨、行動時間帯における神戸市の最高気温（29.6℃、12:00）—

事前学習会3回で既に5コマ（10時間）を終えていたため、第1日目と第3日目を3コマ（各6時間）、第2日目を4コマ（8時間）設定として現地実習に取り組んだ。

第1日目は、不要な荷物をJR三ノ宮駅のコインロッカーに入れて昼食を摂ってから「人と防災 未来センター」西館前へ正午に集合するよう指示しておいた。同センターは団体見学時に事前申し込みをしておくシステムをとっているため、あらかじめ香川がセンターの担当者と打ち合わせをして、館内の見学プランを確立した。この見学プランは館内のシアターでの震災ビデオの視聴、語り部による講話、自由見学を組み合わせたもので、当初計画していた見学時間を少し超過するものとなった。しかし、このうえなく効率的な見学プランだと思われた

ため、見学時間の枠を拡大して実地研修を行った

集合の後、人数確認を行い、携帯電話への連絡で遅刻が判明した1名を除いて団体入場券で入館した。当センターが夏休み期間中の節電対策としてのクールスポットに指定されているため、団体入場料金が半額であったのは幸いであった。館内の見学ルートは次のとおりである。①東館1階「心のシアター」にて東日本大震災の津波災害の映像鑑賞、②西館1階の研修コーナーで語り部による講話を聴講、③西館4階「震災追体験フロア」にある「1.17シアター」にて阪神・淡路大震災の映像鑑賞、④西館3階「震災の記憶フロア」で復興に関わる展示を自由見学、⑤西館2階「防災・減災体験フロア」を自由見学（ワークショップなどにも適宜参加）。再集合は東館1階出口で14:40としたが、連絡が不徹底で半数以上の学生が西館1階の入口付近に集まっていたため、両館の間に全員を集め直し、次の目的地である東灘区森南町へ移動を始めた。

人と防災未来センターのあるHAT神戸では、周辺に集積した他施設や震災復興住宅（隣接する分譲マンションとの違いにも触れながら）の説明をしつつ歩き、阪神電鉄の岩屋駅から普通電車に乗って深江駅まで移動した（図1）。岩屋駅の駅前広場では、利用客に配慮して「眼前の正面が上になる」よう配置された駅周辺案内図の説明をした。カーナビの地図が適宜回転する例を話すと「北が上を向いている地図が必ずしもベストではない」ということが理解しやすいようだ。岩屋駅での乗車以降、団体で公共交通機関を利用する際、今回は団体乗車券ではなく各自にICOCAやPiTaPaなどのプリペイド式カードを使わせた。このようなカードが使用できる区間では、団体乗車券よりも少し割高になるが、こうした方法がより効率的に移動できるので好都合である。

深江駅到着時、天候は本格的な雨だった。雲の様子をうかがうと長く降り続かないような状況だったため、5分前後の雨宿りをしてから小雨の中を歩き始めた。傘は必要だったが、傘無しでも歩ける程度の雨だった。ただ、雷雲に発達しそうな雲も観られたため、歩くのを少し速くして国道2号線を横断して森南町に至った（図2）。森南町は当授業の教科書『よみがえる神戸—危機と復興契機の地理的不均衡—』の第6章で詳述された地区で、土地区画整理事業で復興を遂げた地区の一つである。天候悪化が懸念されたため、西端の三丁目と東端の一丁目

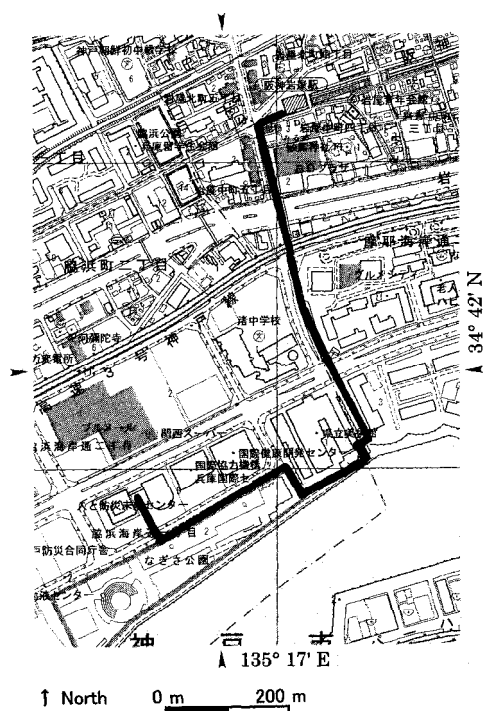


図1 「人と防災 未来センター」から阪神電鉄岩屋駅までの移動経路

(1/10,000 地形図「三宮」、2007年1月1日発行)

付近の東西方向の道路の多くが災害復旧道路として活用された。

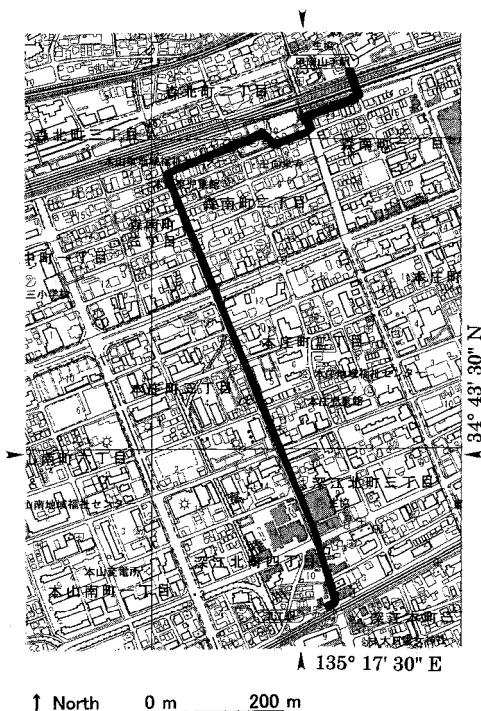


図2 阪神電鉄深江駅からJR甲南山手駅までの移動経路

(1/10,000 地形図「芦屋」、2007年1月1日発行)

JR甲南山手駅は震災時には未開業であった。

は割愛し、中央部に位置する二丁目を中心とした見学を行った。二丁目では区画整理道路、街角剪除（交差点コーナーの斜め切り）、昭和初期の区画整理事業で造成された森公園などをめぐった。森公園には阪神・淡路大震災での犠牲者の名前を刻んだ石碑があり、駅近くの防災対策を視野に入れた地下水汲み上げポンプとともに、受講生は少なからず震災と復興についての認識を新たにできたようだ。森公園でも口頭説明したが、森南町の被災や復興プロセスを克明に描いた記録誌作成会（2000）『森南まち』は、コミュニティレベルの合意形成の難しさを理解するのに好適なドキュメントである。

空模様が怪しくなる中、大降りになるまでに JR 甲南山手駅に至ることができた。ここから普通電車で三ノ宮駅に移動し、ここでコインロッカーの荷物を出して所定の時間までにホームへ戻るよう指示した。全員が揃ったのを確認したのち、三ノ宮駅から須磨海浜公園駅まで再び普通電車で移動した。須磨海浜公園駅には 17 時前後に到着したが、時間的な制約もあったため、ここからは大降りの中を歩かざるを得なかった。宿舍のシーパル須磨までの 10 分弱の間、徐々に雨が穏やかになったが、各自の足元は相当に不快な状態となった。例年の現地実習に比べて、気温が低かったのは動きやすかった反面、降雨のなか 40 名前後で行動する難しさを痛感した。

投宿後は、部屋割り、夕食や宿泊に関する諸注意、翌日の予定などを伝え、夕食会場で 19 時に再集合した。夕食時には、食事前に時間を確保して、事前学習会で課した課題（論文の要約）をまとめたブックレット、翌日のフィールドで使用する神戸中心市街地の縮尺地図、旧居留地の復興に関わる論文（古賀 2014）のダイジェスト、事後学習課題を配布のうえ、各々の配布物についての簡単な説明を施した。

2. 現地実習 2 日目—8 月 25 日（月）、曇りのち晴、行動時間帯における神戸市の最高気温（31.2℃、15:10）—

天気予報で午後に一時的な降雨の可能性が報じられていたため、朝食を済ませてから 8 時にロビーへ集合し、徒歩で須磨海浜公園駅に向かった。月曜であることから神戸方面への上り電車は混雑が予想されたものの、全員が無理なく乗り込めた。最初の下車地は 2 つ目の新長田駅であった。ここも前日の森南町と同様、教科書の第 6 章で詳述された復興地区である。新長田の多くの市街地が震災直後の火事で類焼し、炎に舐め尽されたことは事前学習で確認済みである。ただ、香川は、しばらく新長田の復興地区を訪問していなかったため、直前下見（8 月 22 日に実施）で予定コースを再確認しておいた。

新長田駅で下車したのち、駅のコンコースにあるイラストマップで予定コースを説明し、最初に新長田北地区のシューズプラザを目指した（図 3・図 4）。北地区は、南地区が都市再開発の復興技法（話し合いは経ているもののトップダウン型の大規模復興事業）を採ったのに対し、前日の午後に訪問した森南地区と同様に土地区画整理の技法（まちづくり協議会を核としたボトムアップ型の事業）で復興を遂げた地域である。意図的に曲線状とした街路、歩道の拡幅、電柱地中化など、いたるところに復興を契機とした歩行者主体のまちづくりの形跡を認めることができる。また、区画整理の完成以降も点在する空地は教科書の『よみがえる神戸』でも取り上げられていたが、再開発の難しさを傍証する材料として現地でも説明しておいた。やがて我われ一行は、シューズプラザに至ったが、同施設が時間的に開館前だったため、下見の際にメモしたフィールドノート、さらに山本（2011）が提案した生産縮小期における振興策（付加価値の高い商品の開発や製造）を素材に解説した。我われは、そこから引き返して高架下をめぐり、新長田駅南側の駅前広場に立った。

この広場を含め、我われの眼前に広がる建造物の大半が震災復興事業の成果である（次ページの図 3・図 4）。新長田が高齢者の多いコミュニティであること、そうした環境を踏まえたバリアフリーへの配慮について説明しつつ歩道橋に上がり、災害復興住宅や新長田復興のシンボルとして親しまれている鉄人 28 号モニュメントを見学した。その後、大正筋商店街を中心として災害復興商店街の路面フロア（アーケード）を南進し、末端部で 2 階フロアに上がってから再び針路を北にとった。2 階フロアのテナントは店舗名が記されていない空室ロットも珍しくなく、路面フロアに比べて集客面で不利な場所であることが分かる。新長田駅に戻る経路の途中では、こうした商業環境に加えて、上層階が教科書で触れられていた震災復興住宅になっていることを説明した。

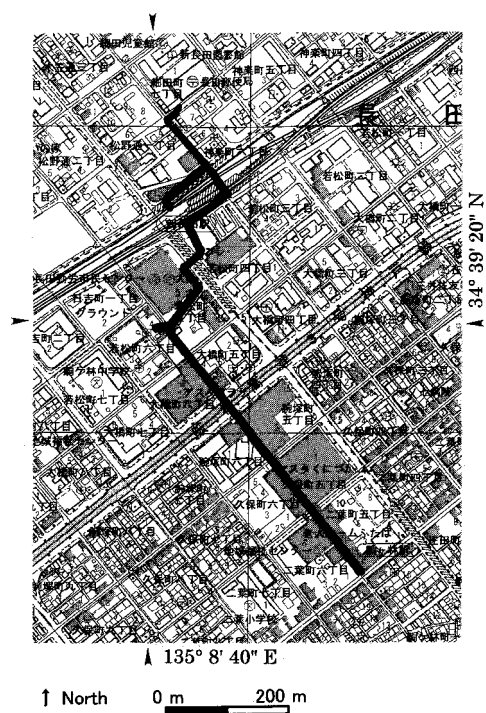


図3 JR新長田駅周辺における移動経路

(1/10,000 地形図「長田」、2006年9月1日発行)

若松町六丁目で進路を変えた西側の広場に鉄人28号像がある。そこから南東方向に歩いた道路が震災復興で築かれたアーケード。

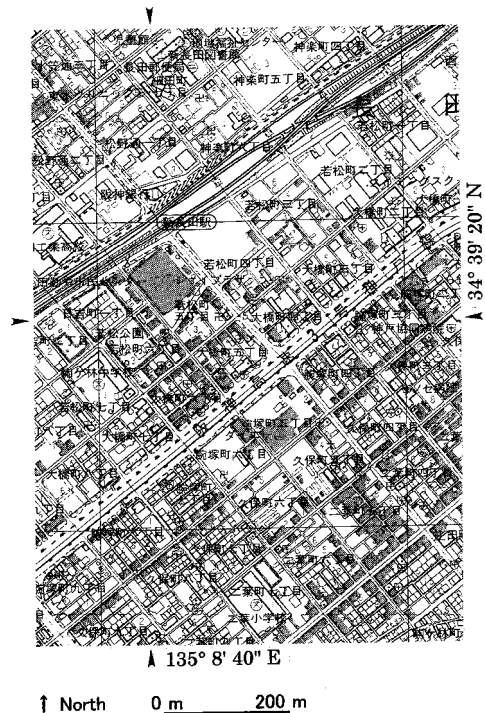


図4 被災直後におけるJR新長田駅周辺

(1/10,000 地形図「長田」、1996年2月1日発行)

この地図の現地調査は1995年9月に実施されている。そのほぼ10年後の現地調査で作成された図3と比較すれば、震災直後の混乱が読み取れる。

新長田での滞在時間は1時間少々であった。本来ならば店舗の営業時間に訪問するのが理想であるが、後のコースとの関係で短い時間で再度電車での移動となった。次に下車したのは神戸駅で、ここから地下街を歩きハーバーランドに至った²⁾。ハーバーランドは震災前からほぼ完成しており、耐震構造のビルで無事だったものも多かったため、神戸新聞社(被災した旧社屋から移転)をはじめとした多くの企業や商業施設が復興のけん引役を果たした重要な地区である。その説明をした後、神戸新聞本社内にある震災展示室を訪問した。ここは時間の関係で30分間自主見学としたが、震災当日から京都新聞の協力を得て新聞を発行したことなどの説明もあり、多くの受講生が食い入るように展示物を見ていた。

神戸新聞社を出てからおおむね海岸線を歩き、モザイクや中突堤付近(中突堤については日照りを歩き続けることになるためクルーズ船桟橋から説明した)を経て、震災で破壊された桟橋の一部が保存されているメリケン波止場(震災メモリアルパーク)に至った。ここは、断層など地震の発生メカニズムが難しく理解できない小学生でも十二分に大地震の怖さを実感できるビジュアルな場所として、初等教育教員の希望者が多い受講生を視野に入れて立ち寄った場所である。教科書にした『よみがえる神戸』でもp.150に原著者の撮影による写真が掲載されている。

メリケン波止場を後にして、我われは南京町(中華街)の南側にある神戸華僑歴史博物館に立ち寄った。震災復興の折にも南京町の人びとが多大な役割を果たしたことは事前学習で説明済みであったうえ、国際都市としての神戸を語るときに中国系住民は不可欠であるため、博物館の見学は必須であった。ただ、この日は月曜日であったため同博物館研究室長の安井三吉氏の特別な配慮で時間限定の開館をしていただいた。この博物館訪問は、個別地域の地理的理解に歴史的背景の把握が欠かせないことを伝える契機になった。また、日陰の少ない暑さの中を歩き続けてきたため体力消耗が著しい受講生もいたが、こうした受講生の体力回復も果たせた。

続いて至近の場所に位置する南京町の西端(西安門)に至り、ここで南京町の概略、昼食解散と再集合について説明してから、ほぼ中央に位置する南京町広場まで移動した。ここで、個人やグループ単位の昼食を摂れるよ

う 13 時前に一時解散したが、これは昼食に訪れる観光客が多い正午～12 時半を避けたためである。再集合を 13 時 50 分に南京町広場として 1 時間少々の昼食時間を確保した。

南京町広場で再集合してから、広場の西側を南北方向に通じる南京北路を歩き、元町商店街（元町一番街）を経由して、ルミナリエの会場となる仲町通を抜け、神戸市役所に至った。この間、中川（2013）や古賀（2014）を使って神戸都心部の震災復興、地価低迷によるマンションの建設について説明した。上記の文献のうち、地図で空間的な把握が図れる古賀（2014）からは、主要な地図をピックアップしてレジュメを作成し、それを第 1 日目の夕食時に配布しておいた。また、居留地には震災後に多くの高級ブランド店が路面店（デパートなどの大規模施設に入居するテナントではなく、自社ビルや他社所有ビルの 1 階部分に外向き配置で入居する店舗）が集積し、この地区のアイデンティティが形成されたことを説明した。マンションもブランド店も視覚的にとらえやすいので、初等中等教育の各教科で近年注目されている「見える化」が実感できたはずである。

神戸市役所では、新館の展望ロビーに上った。他の来客もいる空間なので、ここでは神戸都心部と神戸港についての必要最小限の説明をしてから個人・グループ行動とした。数名が集まっているところでは、質問を受け付けての回答、補足説明などをしつつ 30 分程度を過ごした。ただ、日常的に暑さの中を歩く経験が少ないからか、受講生の中には体力が限界に近付いていると見受けられる者も珍しくなかった。そこで受講生の健康に配慮して、神戸都心部などの自由散策をしてもらうように告げ、併せて夕食時間を再確認して、この日のフィールドにおける団体行動は解散とした。暑さに対する学生の抵抗力が総じて低下していることは由々しき問題だが、熱射病などの事故が生じてからでは遅いので、次年度以降も野外行動では十分な配慮が必要である。

夕食は 19 時から恒例の反省会兼打ち上げコンパとして、宿舍「シーパル須磨」の夏の風物詩であるガーデンバーベキューを楽しんだ。当然ながら未成年の学生に対しては禁酒を厳しく徹底した。受講生たちは炎天下の市街地を歩いた疲れが隠せなかったものの、夕刻に時間的な余裕があったためか疲労困憊の状態ではなかった。ビーチテーブルを巡って感想を尋ねると「疲れたが変化に富んで充実したコースを楽しめた」という意見が多かった。

3. 現地実習 3 日目—8 月 26 日（火）、晴れ時々曇り、行動時間帯の淡路市の最高気温（31.8℃、12:10）—

この日は朝から晴天で、暑くなりそうな天候だったが、大型バスを借上げての移動であったため、前日のような体力消耗の対策に苦慮することはなかった。学外（奈良教育大学大学院）からの受講生は現職の小学校教員で、この日の見学場所を修学旅行引率で頻繁に訪れた経験があり、さらに同日から校務があったため、バスが宿舍を出発する前に我われ一行からの離脱を認めた。

バスは第二神明道路と明石海峡大橋を経由して北淡震災記念公園に至った。1 時間少々の行程である。入館後は、まず副館長の米山正幸氏から淡路市（震災当時は北淡町）の被災についての講演を拝聴し、コミュニティにおける相互理解の深さ（たとえば町内会レベルで家族構成や寝室の位置などを知っている）が震災被害を軽減するのに役立つことを学んだ。その後、館内での昼食場所や再集合の時間を指示してから個人やグループ単位での行動とした。この記念館は屋内展示と屋外展示を巧みに融合させたユニークな施設で、数か所に説明をしてくれる「語り部」やボランティアがいるため、団体行動よりも個人やグループでの行動の方が効果的であると判断したためである。館内各所で受講生が感じたことの詳細については次章に譲る。

見学と昼食の後、借上げバスで京都駅八条口まで直行した。途中、神戸周辺に実家がある受講生 2 名が淡路サービスエリアで途中下車した。後日、彼らから神戸方面のバス停留所が見つからず苦労したことを聞かされた。そこまで下見をしていなかったのは大きな反省材料である。残りの者は 16 時前に京都駅八条口に無事到着し、そこで互いの労をねぎらい 2 泊 3 日の現地実習を終えた。

IV. 事後教育レポートの分析と評価—まとめを含めて—

本授業科目では、厳正な成績評価のために、事前教育のみならず事後教育を徹底している。両者のいずれが欠けても折角の現地実習が物見遊山に終わってしまう危険があるからである。事後教育は現地実習での経験を簡潔なレポートで答えさせる様式である。今回の問い掛けは、①「1 日目に訪問した『人と防災 未来センター』で

優れていると感じた点、改善の余地があると感じた点を、それぞれ 81 字以上、100 字以内で簡潔にまとめよ」、②「2 日目の行程で最も印象に残った見学ポイントを 1 点に絞って挙げ、その理由を続けて記し、81 字以上、100 字以内でまとめよ」、③「3 日目に訪問した『北淡震災記念公園』で優れていると感じた点、改善の余地があると感じた点を、それぞれ 81 字以上、100 字以内で簡潔にまとめよ」、以上の 3 点とした。

課題については、現地実習 1 日目の夕食時に告示した。レポート提出については、まず全ての受講生に E メール添付でテンプレートを送信し、それに記入した後に返信させる方法をとった。テンプレートは、前年度のものを改良して使用した。レポートの締切は、前期成績報告の期限に配慮して 8 月 31 日（9 月 1 日の直前まで許可）とした。レポートの字数を抑制したのは、事前学習における文献研究と同様に、少ない字数で簡潔にまとめる能力の開発を狙うと同時に、「多く書けば良い」という冗長なレポートを書かせないようにするためである。

以下では、上記の①～③について、1～3 の節に分けてまとめてみたい。なお、レポート提出者数は 37 名である。現地実習に行き現地討議にも参加しながらレポートを未提出の 1 名については、評点を低くせざるを得なかった。なお、レポート内容の整理に際し、複数の回答を寄せた者もいるため、各々の質問に対する回答の総数はレポート提出者数とは一致しない。事前学習、現地実習、事後学習を総合しての成績評価の分布は、学部「地理学特講」が秀：4 名、優：17 名、良：8 名、可：4 名で、大学院「人文地理学特論」は秀：3 名、優：2 名、良：0 名、可：1 名であった。

1. 「人と防災 未来センター」で優れていると感じた点、改善の余地があると感じた点

まず「優れていると感じた点」を概観すると次の 4 カテゴリーに大別することができる。数が多い順にそれを列挙すると、①リアリティのある映像（19 件）、②展示全般（17 件）、③語り部や説明員などのボランティア（12 件）、④東日本大震災についても扱っていること（4 件）のようになる。①ではシアターの迫力を大半の者が挙げ、②では「防災教育への配慮」との趣旨を含む回答が 6 件、「子どもでも見やすい」という趣旨の回答が 5 件に及んだ。これらの回答からは、多くの学生が初等中等教育の教員を志す教育学部学生の特質を読み取れる。③では大半の者が「被災者自らがボランティアをしている」との内容を記していた。④には、まだ震災から日が浅いこと、復興に向けての決意や取組みを強調した映像の印象などが影響していると思われる。

他方、「改善の余地があると感じた点」としては、①展示（23 件）、②映像（11 件）、③語り部（2 件）、④説明（1 件）が挙げられた。

①の展示について複数の指摘があった内容の趣旨を記すと、『震災の記憶フロア』の展示物や写真が多過ぎて焦点が定まらない（9 件）、施設（とくに東館）の規模の割には展示物が少ない（6 件）、順路が分かりにくい（2 件）となる。残りは散票的な回答だった。

②の映像については、「効果を強調し過ぎて映像的にしつこい部分がある」（6 件）、「3D メガネは不要」（2 件）、「神戸の映像での関西弁が不自然」（2 件）という趣旨の回答が複数寄せられた。1 件のみの回答だったが「神戸の地名を知らない」と神戸の映像での個々の場所が分かりにくい」という指摘は、地元を良く知る者が見落としがちな視点であり、フラッシュ的に地図を挿入するなどの工夫が望まれる。

③の語り部については、2 件とも「内容が少し個人の価値観に偏っていた」という趣旨の回答であった。語り部はボランティアによって運営されているため、個人の体験も「語り」の基盤となっており、内容が多少偏るのは致し方ないのかもしれない。

④の説明（1 件）は、「展示室で押し付けがましい説明があった」という意見である。防災を強調する際に説教調で説明するボランティアも散見されたので、このあたりは利用者に不快感を与えない職場教育を期待したいところである。

上記の改善点には、「良かった点」と相反する内容もあるが、見学者に価値観の相違があることを踏まえればそれは自然な結果であろう。筆者は何度もこの施設を訪問しているが、展示物の写真が多過ぎることは日々感じる改善すべき点である。被災者自らが見学に訪れることを前提にすれば、「少しでも多くの写真を展示したい」との考えが芽生えるのであろうが、細かな写真が多いと主張がかすんでしまうことも事実である。小さな写真は地域別にアルバム（もしくはモニター画面での自動遷移スライド）にまとめて、展示パネルは大きな写真でメリハリをつければ、施設側からのメッセージが一層的に伝わるような気がする。

2. 2日目の行程で最も印象に残った見学ポイント

回答数は回答人数に一致し37であったが、同じ地点で複数の項目を指摘した回答が僅かにあった。回答を多く集めた順に列挙すると、新長田地区（12件）、神戸港震災メモリアルパーク（12件）、神戸新聞社震災展示室（10件）、神戸華僑歴史博物館（2件）、南京町（1件）となる。新長田地区は予想以上の回答数を得たが、これは事前学習で当地区の復興について深く学んだ成果ではないかと考えられる。

新長田地区で印象に残ったものとして「まちづくり全般」と「二層式の商店街」がともに5件、南地区内のシンボルでもある「鉄人28号モニュメント」が3件（うち1件は上述の「まちづくり全般」と絡めての回答）であった。「まちづくり全般」に関しては「駅からの動線」に言及した回答が多く、「二層式の商店街」では復興住宅を伴っていることやバリアフリーが高く評価されていた。一方で2階部分の商店の集客力が期待できない懸念を記した回答も散見された。

同数で回答数が首位となった神戸港震災メモリアルパークは、「震災の甚大さがリアルに伝わってくる（＝小中学生でも分かりやすい）」が理由としてほぼ全数を占めた。「同じような被害が港湾地域のほぼ全域に及んでいたことを想像して恐ろしくなった」という自然エネルギーに対する畏怖の念を表明した回答もあった。

次いで神戸新聞社震災展示室が10件の回答を得た。ここは地震発生直後からいかにして震災報道を継続したのかというテーマのもとに展示が工夫されている。回答の大半は、震災直後から報道機関としての強い使命感や信念に支えられて新聞発行を続けたことへの賛辞が伴われており、展示されている紙面から緊迫感や混乱を読み取れた感動が事後教育レポートから伝わってきた。意外と知られていない施設であるが、中高生の校外学習や修学旅行では優れた見学ポイントになり得よう。

神戸華僑歴史博物館や南京町は、回答数こそ多くないものの、神戸の歴史からは外せない中国系住民に関わる史実を体感できた点を付記した回答だった。前年に対象地域とした長崎でも中国文化への関心は相応にあった（香川 2014）ので、現代に繋がる歴史を地理学のエクスカーションに組み込んでいく意義は大きいと考える。

3. 「北淡震災記念公園」で優れていると感じた点、改善の余地があると感じた点

回答人数は37人³⁾であるが、複数の点を併記するケースがあるため、「優れていると感じた点」についての指摘の総数は58件、「改善の余地があると感じた点」についての指摘の総数は39件に及んだ。

「優れていると感じた点」で多くの回答を集めたのは、断層の保存展示（26件）、起震車（11件）、メモリアルハウス（9件）、語り部（7件）であり、他は1～2件にとどまった。断層の展示では「リアリティがある」「展示規模のスケール」「展示方法の工夫」などが指摘された。風雨で風化されないよう実物を室内に取り込んだ工夫が高く評価されているのは、標準的な博物館とは異なった当施設の狙いが奏功していると考えられる。起震車では「震度7を体験できる」という回答が圧倒的で、体験できる場所がモデルルームのようにもなっていることも評価されていた。また、メモリアルハウスは、断層直上でも倒壊しなかった鉄筋コンクリート構造の戸建住宅を保存した展示施設だが、家具や食器が散乱した様子に大地震の怖さを実感した旨の回答が大多数を占めた。さらに「語り部」については、震災直後の集落の状況がよく伝わってきた、コミュニティ内の相互理解が減災に繋がることを実感したなど、聴講した内容に心を動かされた者が多かった。

これに対し「改善の余地があると感じた点」については、回答の内容が分散した。回答数が多かった順に列記すると、「展示物の説明が専門的過ぎて少し難解」（11件）、「説明員が少ない」（5件）、「防災に関する展示が弱い」（5件）、「全体を俯瞰できる模型がもっとあっても良い」（3件）、「施設の広報（外部への情報発信）が弱い」（3件）が挙げられる。他の回答内容は1～2件に散った。「展示物の説明の難解さ」については、断層のメカニズムを詳しく理料的に説明しているのが逆に災いしているとも考えられる。小中学生の校外学習や修学旅行の受け入れを前提にすれば、新聞社の小学生向け紙面のような解説がもっと拡充されてもよからう。「説明員の少なさ」は施設が広い余計に目立ってしまった可能性もあるが、ポイントを絞って小学生でも理解できる説明員を配置すれば、上述した難解さも同時に改善できるのではなかろうか。「防災に関する展示の少なさ」は、当施設が断層に特化したものであるため、防災よりも被害に力点を置いている結果であろう。阪神・淡路大震災では家財道具による打撲などで多くの死傷者が出たため、家屋内での防災対策をメモリアルハウスで展示するなどの工夫があれば、展示における一層の説得力を期待できよう。「全体を俯瞰できる模型」は実物展示が大きいと、

構内案内図を兼ねた模型を増設するのも一案ではないだろうか。「施設の広報が弱い」については、全てが「せっかくの施設なのに知名度が低い」という趣旨の意見を伴っている。費用対効果を考えると、広報の強化が来館者の増大に直結しない限り広報の強化は難しいのかもしれないが、震災から約20年を経て「震災の記憶」を防災に役立てていくためには、「負の遺産」をプラスに転じていくための財政支援が必須であろう。

改善すべき点の指摘には、「休憩スペース（見学中に腰かけられる場所）が少ない」（2件）という回答もあった。高齢者や子どもの来館に一層の配慮を求めた無視できない指摘であり、椅子を設置するスペースも十二分にあるので、こうした改善は可能な限り早く講じていただきたいところである。

4. まとめ

今回の現地実習対象地域は、近畿圏外へ出るのが通常である当科目では異例の近畿圏内、しかも無理をすれば日帰りが可能な場所での実施であった。あえてこうした場所を対象地域に選定した理由には、とくに東日本大震災以降、防災教育と減災教育への関心や必要性が高まっているという事情がある。しかし、津波や原発の是非に注目が集まる一方、直下型大地震に対する関心が高く維持されているとは言い難い。阪神・淡路大震災から約20年の歳月を経て惨劇の記憶が徐々に薄れゆくなかで、我われは震度5の揺れを経験した京都にある大学として、震災の記憶を語り継いでいく責務がある。そのささやかなステップが今回の現地実習で踏み出された。受講生諸君が今回の経験を近い将来に赴任先の教育機関で活かしてくれることを願い本稿のまとめに代えたい。

付記

本授業科目の実施にあたり「人と防災未来センター」のみなさま、神戸新聞社のみなさま、神戸華僑歴史博物館研究室長の安井三吉さま、神戸市役所のみなさま、野島断層保存館副館長の米山正幸さま（以上、訪問順）をはじめ、多くの方々から多大なお力添えをいただきました。末筆ながら記して御礼申し上げます。

注

- 1) 2002年以降における現地実習の成果は、すべて翌年の「京都教育大学教育実践研究紀要」にまとめている。奇数年刊行のものは学部前期集中実施科目「地理学特講」（偶数年開講）、偶数年刊行のものは学部前期集中実施科目「地理学研究」（奇数年開講）の成果である。また、その大半は大学院前期集中開講科目「人文地理学特論」（毎年開講）と現地実習を共通実施している。授業実施年にしたがって現地実習の実施地域を列記すると、2002年：東京、2004年：日高・道央、2006年：長崎、2008年：道南・道央、2009年：松山、2010年：津和野・萩・石見銀山、2011年：高松・丸亀・琴平、2012年：八郎潟・白神山地・弘前・函館、2013年：端島・長崎・佐賀となる。紙幅の都合もあり、2011年以前に実施したものについては、2012年実施分の備忘録である香川（2013b）の文献欄で書誌情報を確認していただきたい。また2013年実施分については香川（2014）に成果をまとめている。
- 2) 紙幅の都合により、神戸駅から神戸市役所までの行程をまとめた地図は省略した。
- 3) 京阪奈三教育大学の単位互換協定制度を活用して受講した奈良教育大学大学院の学生は、現職の小学校教員であり、「北淡震災記念公園」を修学旅行の引率業務でほぼ毎年訪れている。今回の実習の3日目も修学旅行の下見のため朝食後に離脱したが、我々と同日に修学旅行の下見で「北淡震災記念公園」を職場の同僚と訪問している。今回のレポートはその経験をもとに回答してもらったものである。

参考文献

- 安藤元夫（2003）『阪神・淡路大震災 被災と住宅・生活復興』学芸出版社.
- 朝日新聞社（1995a）『報道写真全記録 阪神大震災』朝日新聞社.
- 朝日新聞社（1995b）『朝日新聞 大阪本社版 紙面集成 阪神大震災 1995.1.17～2.17』朝日新聞社.
- 岩田 貢・山脇正資編（2013）『防災教育のすすめ—災害事例から学ぶ—』古今書院.
- 香川貴志（2013a）「東日本大震災を受けての防災教育普及への取組み—さまざまな論考の整理と三陸地域での現地検証—」京都教育大学紀要 123, pp.31-45.
- 香川貴志（2013b）「義務教育で重視される項目をたどる北東北～道南フィールドトリップ—2012（平成 24）年度「地理学特講」の覚え書き—」京都教育大学教育実践研究紀要 13, pp.11-21.
- 香川貴志（2014）「長崎ば、さるかんね 2」京都教育大学教育実践研究紀要 14, pp.11-20..
- 香川貴志（2015a）「阪神・淡路大震災 20 周年を機会として復興と防災・減災について考える（第 1 報）」京都教育大学環境教育研究年報 23, pp.7-15.
- 香川貴志（2015b）「阪神・淡路大震災 20 周年を機会として復興と防災・減災について考える（第 2 報）」京都教育大学環境教育研究年報 23, pp.17-25.
- 香川貴志・久保倫子訳（2014）『よみがえる神戸—危機と復興契機の地理的不均衡—』海青社（Edgington, D.W. 2010 “*Reconstructing Kobe: The Geography of Crisis and Opportunity*” UBC Press, Vancouver）.
- 記録誌作成会（2000）『森南まち』記録誌作成会.
- 古賀慎二（2014）「阪神・淡路大震災の復旧・復興過程から『まちづくり』を考える—神戸市都心部におけるオフィスの立地変化を通じて—」（吉越昭久編『災害の地理学』文理閣, 所収), pp.92-116.
- 中川聡史（2013）「神戸市中心部における新規居住者の属性について」国民経済雑誌 207-3, pp.81-92.
- 日本地図学会（1995）『阪神淡路大震災地図』日地出版.
- 野間晴雄・香川貴志・土平 博・河角龍典・小原丈明（2012）『ジオ・パル NEO—地理学・地域調査便利帖—』海青社.
- 山本俊一郎（2011）「産地縮小期における神戸ケミカルシューズ産地の社会的分業構造の変容」大阪経大論集 62-2, pp.43-58.